

2013年7月25日／浪宏友ビジネス縁起観塾

真理への感動

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「随喜功德品」

1. 随喜功德品の概要

- (1) 弥勒菩薩が、仏の無量寿の教えを聞いて随喜した人にはどのような功德があるでしょうかと質問します。
- (2) 質問に対して釈迦牟尼世尊が、五十展転（ごじゅうてんでん）のお話をします。
- (3) 引き続き、須臾聞法（しゅゆもんぼう）のお話をします。
- (4) 偈（げ：韻文体の経文）で、五十展転と須臾聞法のお話を繰り返します。

2. 五十展転

もしある人が法会（ほうえ）のなかで、この教え（仏の無量寿の教え）を聞いて、「ありがたい」という喜びを感じ、ほかのだれかに、自分の力でできる程度でいいから、いま聞いたばかりの話をしてあげたとしましょう。それをきいた人もまた、おなじような随喜の心を起こし、おなじようにほかの人に伝えたとしましょう。こうして五十回も転々と伝えられたとして、その五十回めにこの教えを聞いた人が、「ありがたい」という感激を覚えたとしたら、その功德は、ある大金持ちが一生のあいだありとあらゆる布施を行ったその功德の、何億倍もの価値があるのです。いわんや、最初に法会でこの教えを聞いた人の受ける功德となると、まことに無量無辺であります。（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 180~181）

3. どのような伝え方をしたか

最初の人から順次伝言されて、五十回目に聞いた人が感動するとありますが、このときの伝え方には次の二つの条件が満たされています。

- (1) 其の所聞の如く（庭野日敬著『法華経の新しい解釈』p. 490）

第一の条件は「其の所聞の如く」です。初心の人々にとっては、教えを聞いたら、その通りを他へ伝えるということが大切なのです。そうでないと教えのかんじんなところを誤り伝えるおそれがあるからです。

- (2) 力に随って（同p. 492~493）

第二の大切な点は、「力に随って」ということです。

これには二つの意味があり、そのひとつは「その人の力相応に」という意味、もう一つは「その人の力のあらん限りを尽くして」という意味です。

- ① はじめて教えを聞いたばかりの人が、高僧・名僧のような説法ができるはずがありません。ですからただどしどしい話しぶりでもよい、話術は下手でもよい、あるいは話にかぎらず、文章のうまい人は文章で伝えてもよい、とにかくその人の才能と経験に相応して、教えを伝えればいいのです。これがはじめの意味の「力に随って」です。
- ② しかし、いくら話は下手でも、心をこめて、自分にできることを尽くして教えを伝えようと努力すれば、その熱心はかならず相手を動かすものです。要するにまごころの問題です。これがあとの意味の「力に随って」です。

4. 五十人目が感動する理由

(1) 感動する理由（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 181）

- ① 最初の方は、信仰的な雰囲気を持つ法会のなかで、よく法に通じ、説得力のある指導者の話を聞いたのですから、おおいに感激し、大きな功德を受けるのはもったもです。
- ② それがつぎからつぎへと転々と伝えられた五十人目ともなれば、話術もなにも抜きにした、信仰的な雰囲気もない、骨ばかりの話になりましょう。
- ③ ところが法華経は、その骨（内容）がかぎりなく偉大ですから、五十人目にいたっても、感銘をおぼえざるをえないのです。

(2) 法華経の骨ばかりの内容とは

ここでいう法華経の内容とは、仏の無量寿の教えです。「仏の本体は、宇宙の万物を生かしている久遠実成の本仏であり、つねにわれわれと共にいてくださる不生不滅の存在である」（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 169）という教えです。

その骨ばかりの内容とは「自分は久遠実成の本仏に生かされている」（同p. 169）ということだと思います。

5. 大金持ちの行った布施

大金持ちの行った布施は、財施と法施です。

① 財施

この宇宙間に存在するありとあらゆる衆生（人間をはじめ天上界・畜生界・餓鬼界・地獄界にいるもの、鳥・獣・虫・微生物まで）のすべてに対して、それらのものを幸せにしてあげようと思い、生活を楽しむために欲しているものをすべて与え、八十年間も与え続けた。

② 法施

衆生たちが年老いて死期が近づいてきたのを見て仏の教えを説き、すべての迷いを除き尽し、どんな境遇にも心をふりまわされない境地に導いた。

6. 功德が大きい理由

仏の無量寿の教えを、五十回目に伝え聞いた人の功德が、大金持ちが一生のあいだありとあらゆる布施を行った功德よりも大きいのは、何故でしょうか。

(1) 正法を聞いておぼえる喜び

第一に、正法を聞いておぼえる真の喜びは、なにものにも比べることのできない尊いものであるからです(庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 181)

「正法を聞いておぼえる真の喜び」とは、生命の喜びです。この喜びを得た人は、自分のありのままの生命を生き生きと発現させ、すくすくと成長させる道に入ります。このため、功德はこれからどこまでも大きくなります。

大金持ちの布施の功德とは、次元が違いますから、比較することができません。

(2) 無限のエネルギー

「第二に、その喜びはこれからさき人から人へと展開していく無限のエネルギーを持っているからです」(同p. 181~182)

「正法を聞いておぼえる真の喜び」は、自分・他人・世間のすべてをしあわせにしたいという願いにつながります。教えを伝えた人が自分と同じ喜びを持てば、その輪はさらに広がります。こうして功德は際限なく広がっていくのです。

この意味でも、大金持ちの布施の功德とは、次元が違いますから、比較することができないのです。

7. 須臾聞法

随喜までには至らなくても、次のようなことを行なえば、行なった人に大きな功德があると説かれています。

- ・ 僧坊に行って、少しの時間(須臾)、妙法蓮華の教えを聞く(聞法)。
- ・ 教えを聞いているところに人が来たので、ここに座ってお聞きなさいと勧める。
- ・ 教えを聞いているところに人が来たので、自分の席を半分譲って教えを聞かせる。
- ・ 教えを聞きに行くとき他の人を誘い、誘われた人が少しの時間教えを聞く。

8. 須臾聞法の意義

これは、つまり法縁のたいせつさをいってあるのです。われわれはすべて仏性をもっていることにまちがいはないのですが、縁あってその仏性が目を覚まさないければ、救いにたつことはできません。ですから、なによりもまず教えに触れることが先決条件であり、したがって、教えに触れる縁というものはじつに尊い、たいせつなものなのであります。いわんや、他人にその縁をあたえらるとなると、さらに尊い行為といわなければなりません。(同p. 182)

9. 五種法師の功德

(1) 経文

須臾聞法の功德のあとに、次のような経文が続いています。

「阿逸多、汝且く是れを觀ぜよ。一人を勸めて往いて法を聞かしむる功德此の如し。何に況や、一心に聴き説き読誦し、而も大衆に於て人の為に分別し、説の如く修行せんをや」(『訓
あ いっ た なんじしぼら こ かん いちにん すす ゆ ほう き くどくかく ごと いか いわん
いっしん き と どくじゆ しか だいしゅう おい ひと ため ふんべつ せつ ごと しゅぎょう
 訳妙法蓮華經并開結 立正佼成会』p. 300)

(2) 現代語訳

「阿逸多よ、しばらくのあいだ心を鎮め、この真実をじっとおもいめぐらしてみなさい。ただ一人にすすめて、法を聞かせる功德も、これほどのものがあるのです。ましてや、みずから教えを一心に聞き、読誦し、しかも多くの大衆のためにさまざまに説き分けて教えを伝え、それらの人がそのとおり実践したならば、どれほどの功德があるかわからないのです」(庭野日敬著『新釈法華三部経 7』p. 295~296)

(3) 五種法師

ここに説かれているのは、五種法師を行ずる功德です。五種法師は、法師品で解説されています。(庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 102)

受持： 教えを受持していく決意を念々に新たにすること。

読： 教えをくりかえして学ぶこと。

誦： それを誦んじることができると心につけること。

解説： ひとのために解説してあげること。

書写： その教えが世にひろまるようにあらゆる努力をすること。